

唯一の趣味

「もったいない」これは私がよく言われることだ。私は必要がなければ家から出たくない質だ。休日などは本当に家から一步たりとも外に出ないことも珍しくない。休日に友人と遊ぶなどほとんどない。観光旅行など以ての外だ。こんな私を見て人はもったいないというのだろう。そんな私だからなのだろう、心に残った余暇経験などすぐには思い浮かばない。私はいつも何をして過ごしているのだろうか。そう考えたときにパッと浮かんだもの、それは本だった。振り返ってみれば読書は唯一と言っても良いくらい、私の人生において継続することができた数少ない余暇活動ではないだろうか。

私が本を意識したのは幼稚園の頃、一冊の本に出会ったからだと思う。『いつでも会える』この本は今までを振り返ってみても1番の本だと私は思っている。何度も読み返してはその度に感動し泣いた覚えがある。しかし、その後の小学校や中学校、高校では、それほど本を読んでこなかった。部活に勉強、やるべきこと、やらなければいけないことがあったからだ。そんな私が大学生になって読書に没頭するようになった。それはなぜか、単純に暇を持て余したからだ。大体の大学生がそうだと思うが大学に入ってから、自由な時間が段違いに増えた。特に私の場合は通学時間が相当に増えた。電車に乗っている間、いかんせん暇なのだ。そこで通学時間を読書に充てようと考えた。すると久々の読書に胸が躍るような感覚になった。読書の良さを改めて実感した。文章から世界を頭の中で創造する。それは映画やドラマ、漫画やアニメなどとは全く異質のモノのように感じられた。それらは他人のイメージで作られたモノであり、違和感を抱くことが少なくない。それに対し、本は全く違和感のない世界を自分で創造し読み進めることができ、他人の人生や経験を疑似体験したり、他人の頭の中を覗き見したりすることができる。また周りの環境、例えば場所や天候に干渉されず、自分のペースで読むことができる。挙げはじめたらキリがないほど読書の良さを実感させられた。

読書の素晴らしさに再び目覚めた私が最近最も好きな時間は、日向ぼっこをしながら本を読む時間だ。中でも秋の陽気は最高で、読書の秋とはよく言ったものだと思う。暖かな日向でいすに座って読書をし、音楽でもかけようものなら、私にとってこの上ない時間の過ごし方だと思う。そんな中で最近、新書や専門書を読むことで新たな知識を得、疲れたり飽きたりすれば、小説を読んで息抜きをする。私にとってまさに本がストレス発散、趣味であり、学習ツールとなっている。また読書から新たな繋がりができたこともある。

技術革新が目覚ましい現代において、読書が再び注目されているのをご存じだろうか。今注目されている人工知能、通称AIに人類が勝てるとすれば唯一文章読解能力だといわれていることを。読書離れが叫ばれて久しいが、その文章読解能力でさえ低下してきているという。また本当にストレス解消に効果があることは読書や運動、音楽などだといわれている。これらの情報も私は読書から得たものだ。そんなことを知って読書をしない理由がない。本というものは教養を高めてくれると同時に、ストレスの解消にもつながる。そんな読書は私にとってかけがえのない余暇活動だろう。これから大学を卒業し、年老いても、ずっと続けていこう。

「未知との遭遇」

心に残る最高の余暇経験は1か月間のインド旅である。大学3年の春休みに高校時代の友人と3人で、大きなバックを1つだけ背負って未知の世界に足を踏み入れた。1か月間で北から南まで8つの地域を訪れた。最初は、これぞインドというような混沌と多様性の街首都デリー。続いて、ガンジス川が流れるヒンドゥー教の聖地であり、いたるところに牛と犬が歩いており異様なにおいを放つ街バラナシ。世界遺産タージマハルがあるアーグラ。マハラジャの宮殿都市でありピンクシティとも呼ばれるジャイプル。飛行機に乗って南に移動し最初に降り立った、まるで南国の楽園かのような街コーチン。アラビア海に面したビーチが数多くあるが危険も見え隠れする街ゴア。蒸発しそうなほど暑い、とにかく暑い、巨岩だらけの街ハンピ。最後に、食べ歩きするのに最適な街チェンナイ。街から街へと移動するたびに人々の服装から言語、気候、食べ物、宗教などががらりと変わり、まるで違う国へ移動したのかと思ってしまうほど、どの街も全く異なる雰囲気をもっていった。

この余暇経験は私にとって全てのことが新鮮で驚きに満ちたものであったが、その中でも特に印象的だった2つのことがある。1つ目は、インドと私が暮らしてきた日本との環境や文化の違いである。特に、人との接し方の違いには驚いた。日本では道を歩いていて話しかけられることはほとんどないが、デリーでは10歩につき1回は話しかけられた。話しかけてくる内容は様々であるが何かを買うように要求されることが最も多かった。商魂たくましいと言うのだろうか、私が何度目かの「NO」を言うまで彼らはなかなか引き下がらなかった。最初のうちはこうした違いに驚き戸惑ってしまったが、この経験から、何事も慣れが肝心であると改めて気づかされた。インドに着いて何日間か経ったときには、何度も声をかけてくる物売り、鼻を突く独特の匂い、大通りを埋め尽くすほどの人、牛、犬、リクシャー、オートバイ、車の波にも少しずつ慣れて、これらこそが混沌と多様性に満ちた国インドらしさなのだと感じられるようになった。

2つ目は、ヒンドゥー教の宗教行事プジャーである。プジャーは礼拝であると聞いていたから、静寂に包まれた厳かな雰囲気を想像していた。しかし、プジャーが行われるガンジス川のほとりに着いてみると、壇上で祈りを捧げるバラモンと川の対岸にまで優に届くだろう音量で流される音楽とともに、人々は意気揚々と手拍子をしながら歌い、踊っていた。想像と全く異なるその光景に驚きしばし立ち尽くしていたが、場を盛り上げていた司会者のような男性に促されていつの間にか私も手拍子をしていた。火のついたいくつもの蠟燭が燭台の上で揺らめく幻想的な夜だった。この体験を通して、いかに自分が小さな世界しか知らないのかを気づかされた。

1か月間のインド旅を終えて羽田空港に着いた瞬間、ずっと日常が戻ってきた。日本での日常とインドでの体験があまりにもかけ離れていてインドに行っていたことがまるで長い夢を見ていたかのような不思議な感覚がした。けれど出発の時はまだ寒い冬だったのに、帰国したときにはもう桜が満開に咲いていた。旅を終えてからはや1年が経とうとしているけれど、夢の中での出来事とそこで感じたこと、学んだことは今でも1つ1つ鮮明に覚えている。

「爪先から知る」

私には趣味らしい趣味がない。余暇ができたらとにかくこれ！というように熱狂的になれるものをまだ持っていないのである。普段自由な時間ができたら何をしているのかと考えてみると、漫画や小説を読んだり、ゆっくり料理をしたり、テレビを見たりと、のんびりと過ごしている。もちろん、友人と遊びに出掛けたりもするし、友人と過ごすのもとても楽しい時間だが、私にはひとりでのんびりとする時間も必要だ。自分の中のスイッチを完全にオフにして、充電する時間。

その充電時間の好きなことの1つが、爪を整えてマニキュアを塗ることである。飲食店でアルバイトをしているので、あまり頻繁にはできないし、落とすにくいデコレーションもできない。とは言え、手の凝ったかわいいネイルができないのは、バイトのせいだけでなく、私の技量のせいでもある。自分で凝ったネイルチップを作れるほど器用なわけでもないのだ。それでも爪を整えるのが好きだ。無心でひとつひとつゆっくり塗っていくあの時間が、どの色や配色にしようかと悩むあの時間が、乾くまでもう少しだと待つあの時間が、なんだかとても好きなのだ。それに、爪の先まで自分の好きなもの（色）だと幸せな気もちにもなり、しゃんとする気もする。

ある日、私のネイルを見て友人が「私にもやってほしいくらいにかわいいね。」と褒めてくれた。その一言がきっかけで、彼女の爪を整えて、マニキュアを塗ってあげることになった。私も人の爪に塗るのは初めてで少し緊張した。ひとつまたひとつと塗っていくたびに、彼女が出来上がりを楽しみにしてくれていることが分かった。すべて塗り終わると、「これバイトまで絶対落とさない！ありがとう！」と本当に喜んでくれた。彼女の嬉しそうな顔に、こちらまで幸せを分けてもらった気分だった。さらに彼女は、「私ね、いつもあなたが、たった2・3日しかできなくても丁寧にネイルしていたり、その時間を大切にしているところをすごく素敵だなと思っているよ。」と言ってくれた。彼女の言葉に、私はまた嬉しくなった。いつもはひとりでひっそりと満足していることが、彼女のおかげでしあわせが倍になったようだ。

大なり小なり、それまで自分のためにやっていたことが、ある日突然人のためになったり、自分が気にも留めていなかった自身の行動が人に影響を与えていたことに感動した。そして、こんな自分の技量でも喜んでくれる人がいるということはとてもうれしかった。はじめに、「私には趣味らしい趣味がない」と述べたが、それと同様に何か目立った特長や特技も持ち合わせていない。だからかもしれないが、これだけは誰にも負けないと言えるようなことがなく、自分に自信を持っていない。そんな私に対する、彼女の喜んだ顔と優しい言葉は、大袈裟かもしれないが、私に「そのままの自分も素敵だよ」と背中を押してくれた気がするのだ。現状じゃ満足いかない、今の自分より成長したいという思いを持ち続けることももちろん大切だと思うが、素直に「今」の何か物足りない自分も好きになってあげられたらいいな、そうなりたいなと思わせてくれた。些細ではあるが、そんなやさしい気持ちをくれた友人との時間である。